

小学校では、スキー教室があった。小学4年生になると、奥羽本線に乗り、大沢スキー場というところに出かけた。リフトがなかった。レストハウスとは言えない小屋のようなものがあるだけだった。リフトがないということは、斜面を滑った後に、地道に上がっていかなければならない。それでも十分楽しかった。これが、小学5年生、6年生と続いた。

電車に乗って出かけるだけでうれしかった。あの頃は、リフトがなくても楽しかった。大沢駅の巨大なつららが今でも印象に残っている。きっと、まだ子どもで小さかったので、大きく見えたのかもしれない。

一冬に一回だったと思うが、午前中いっぱいを使って、小学校の近くの山に行き、スキーの授業があった。スキー場ではない。牧草地のような山である。近くと言っても、それほど近い距離ではない。その道のりを小学生がスキーを担いで、重いスキー靴をもって歩いていくのである。かなりの体力と根性が必要となる。今では考えられない。当時の先生も大変だったことだろう。

小学校時代のおかげで、スキーはできるようになった。中学時代には、友達と何度か奥羽本線に乗って栗子国際スキーに行った。ここで、リフトのすばらしさを知った。大沢スキー場とは大違いだった。

高校ではスキーとは縁がなかった。大学に入り、時代の波もあり、またスキーを始めた。そこからは、毎年、冬になるとスキーに行くのが当たり前になった。いろいろなスキー場に行った。福島県だけでなく、山形県、宮城県、岩手県、栃木県と遠征した。いつの間にか、年末は、岩手県の安比高原スキー場に行くのが定番となった。

そのうち、スキーブームの終焉に合わせたかのように自然とやらなくなっていった。ところが、イタリアのローマ日本人学校では、スキー教室があった。ローマのスポーツ店で、スキーにブーツと一式を買いそろえた。

帰国すると、子どもがまだ小さく自然とスキー場に行くようになった。そり遊びから始めてスキーに移行した。ここから、家族でのスキーが始まった。年末の安比高原スキーツアーも復活した。長男には、スキーが合ったらしく、大学に入っても続け、5月になると山形県の月山までいくほどになった。

数年前だが、家人と箕輪スキーに行った。滑り終え、駐車場でブーツを脱ごうとしていた家人のブーツからバキッという異常音がした。割れた。「これは、もうスキーはやめなさいということか」と半ば笑っていた。自分もブーツを脱ごうとした。すると、異変に気付いた。すでに割れていた。イタリアで購入したものである。今までよくがんばってくれました。お疲れ様でした。めでたくというか、悲しくというか、同じ日に、二人そろってスキーブーツが割れたのである。偶然ではないだろう。

海外に行ってもスキー教室があり、教頭で行った南会津の中学校にも、当たり前のようにスキー教室があり、校長で行った奥会津の小学校でも、もちろんスキー教室があった。娘が大学に進み、スキーからスノーボードに切り換えるときにもスキーで付き合った。スキーを卒業しようとする、いつもそうはさせてもらえなかった。ところが、あっけなくホームグレンデである箕輪スキー場で卒業となった。

それ以来、スキーはしていない。だが、箕輪スキー場の脇を通ると、ブーツだけレンタルし、また滑りたくなる自分がある。どうせなら、久しぶりにまた安比まで行こうか。常宿としていたペンションのオーナー夫妻は、お元気だろうか。福島県出身の方である。またスキーシーズンがやってくる。